



# まち びと

— vol.5 —

## 日常のつながり=お宝

ご近所同士の声かけやお茶飲み、趣味のサークルの集まりなど、  
普段あまり意識していないようなつながりや支え合いが、  
「地域のお宝」と呼ばれ注目されています。  
このお宝広報誌「まちびと」では、つながりをテーマに皆さんの日常を取材し、  
その暮らしの一部をご紹介します。



## 人とのつながりや 支えに感謝



幕別町本町で暮らしている郷司清さん(86歳)は、ご近所さんや活動を共にする仲間たちと交流しながら、住み慣れた地域で楽しく暮らしています。郷司さんは自律神経を整えるため、朝起きてから日光を浴びながら座布団の上で足ふみ運動を行い、ぬるいお湯に浸かる日課を大切にしています。また、日中はご近所さんと挨拶やちよつとした立ち話をしたりしているそうです。郷司さんは、「同じ地域に住んでいる方々と挨拶や立ち話をするのは楽しいし、とても大切なことだと思う。ご近所さんの家のカーテンが開いていたらホッとすると、お互いに顔を合わせて会話をします。運動だけではなく、交



### 健康第一!

流も健康作りには欠かせないものだよね」と笑顔で語ってくれました。そんな郷司さんは、「動ける範囲で様々な方々と交流してみたい」と考えるようになり、町主催の講座や体操に参加するようにになりました。コロナ禍になってから、そこで出会った方々と一緒に新しく『脳トレサークルひまわり会』を立ち上げたり、近くで活動している地域サロンの『あさひまちサロン』へ新たに参加しています。「毎週誰かと交流を持っているのは楽しい。とても充実している」と話す姿を見て、交流の輪を広げながら楽しく活動することが郷司さんの元気の源であることを感じました。



「僕は胃がないけど、色んな人に支えてもらったり、教えてもらったことがあるから、今もこうして元気に暮らすことができる。日頃、感謝の気持ちを持って生活することが大事だと思うよ」と郷司さん。仲間たちとの交流を大切にしている郷司さんの周りには、笑顔がたくさんありました。

## 体操が繋いだり 新しいつながり



札内にある北栄町近隣センターでは、60〜75歳の仲良し5人組の奥様が月に2〜3回、火曜日の午後1時30分から集まり、体操やお喋りを中心に活動しています。この集まりは『ひび・腰痛体操小組』といい、集まり始めたきっかけは、町開催の膝痛・腰痛改善教室に参加した時に出会った仲間たちと意気投合し、「このまま解散するのは寂しいから、今後も皆で集まって体操しようよ!」と同窓会的な形で再度集まり、活動をするようになりました。代表の吉田嘉代子さん(69歳)は、「集まってお互いに顔を見ながら近況報告をしたり、皆で次ほどの体操をやるうか、ちよつと疲れたから休憩(お喋り)しようかと自分たちのペースで活動出来るのが魅力だと思えます」と笑顔で語ってくれました。

### 自分たちのペース

『ひび・腰痛体操小組』は、令和4年9月に結成し、コロナ禍でも換気や消毒などの感染対策を実施しながら活

### 心安らぐ仲間

動を続けてきました。また令和5年5月には、結成から半年が経ったので成果を見て欲しいと、改善教室の保健師や理学療法士の先生を招いて、活動の成果を見てもらったり助言を受けたりしたそうです。活動中は、「今日膝の調子が悪いから楽な姿勢でやらせてもらおうね」「今日は気温が高いから軽ストレッチを中心にやろう」と自分たちのペースを大切にし、お互いに気かけ合いながら活動しています。「自分の調子に合わせて体操できるし、体操中も皆が見守ってくれているから安心して参加できるんだ」「毎週ここに来て皆と身体を動かしたり、お喋りするのが楽しみな」と、小組の皆さんは楽しそうに話してくれました。

体操やお喋りを中心に楽しく活動している『ひび・腰痛体操小組』の皆さんですが、その他にも、お茶会やご飯、温泉に行ったりと、活動外でも交流があります。今までは活動後に皆で話し合い



予定を立てていましたが、最近グループLINEで予定を立てたり、その日あった出来事を伝えあっているそうです。「悩み事、楽しいこと、腹立つことも皆で分け合うことで元気を貰えているの」と、あるメンバーは笑いながら話していました。コロナ禍の影響で人と人とのつながりが希薄化する中、意気投合した仲間達と一緒に自分たちの活動場所・居場所を見つけ、健康作りをするのは、とても良いことだと思いました。今回の取材を通じて、この仲良し5人組からは共通の趣味を通じてつながる方法や、行政や専門職などの社会資源を上手に活用しながら活動を継続することを教えていただきました。コロナ禍でもつながりを守る様々な工夫があり、とても素晴らしいと感じました。



## レクダンスの仲間たちや 地域の方とのつながり



忠類白銀町で暮らしている田子康子さん(74歳)は、月3回(火曜日)午後1時30分から午後3時30分まで、忠類コミュニティセンターで活動している『レクダンスちゅうるい』の代表を務め、仲間たちと一緒に楽しくレクダンスをしながら交流をしています。『レクダンスちゅうるい』は70〜80代の女性28名で構成されており、活動中は田子さんが先生となつて前に立ち、お手本になりながら踊っています。コロナ禍の影響で施設が使用できない時はお休みをしていますが、それ以外は感染対策を実施しながら活動を続けていたそうです。参加されている方は、「ここはコロナに負けず、加齢にも負けず、若者にも負けない集まりだよ」と楽しそうにお話してくれました。

活動中は所々休憩を挟みながら、自分たちのペースで8曲程度踊っています。休憩中は皆で椅子に座りながら、お互いの近況報告やちょっとした世間話、レクダンスの振り付けなどについてお話をしています。

### 元気の秘訣

田子さんは「近所さんとの交流も大切にしており、朝起きたらカーテンが開いているか確認したり、多めに作ったおかずをお裾分けしたりと、何気ない見守り活動も行っています。田子さんは、「近所さんがデイサービスに通う日に自宅に居たら凄く心配になるし、顔が見たくて訪問したりするんです。忠類生まれで昔から地域の方に見守

られて育ってきたから、周りの皆さんは自分の親のようですね」と話してくれました。



られて育ってきたから、周りの皆さんは自分の親のようですね」と話してくれました。

## つながりある暮らし キラリ☆セカンドライフ



毎朝の日課である散歩。現役の頃から継続する卓球と筋トレ。家事や畑の農作業に、卓球仲間との飲み会。活動的なメニューが並ぶ笹川務さん(73歳)の生活は、現役時代に受講した、定年退職後の生き方を学ぶ研修からヒントを得ていました。

### 退職したそのあと 「自分なら」どうする？

消防士だった現役時代。査察業務を通して、「人暮らしの高齢者の方に接する機会がありました。奥様のボランティア活動を手伝いながら、障害を持つ仲間たちとの関わりも経験。「生活状況はそれぞれでも、人とのつながりが毎日の生活に楽しさや安心をもたらすのだろう」と思っていたところ、退職を機に前向きな人生を歩むことを研修で学び、つながりを持つことは自身にも言えることだと気づきました」と笹川さん。

それからは「自分の」退職後を見据えて、興味のあることや人との出会いに積極的に関わるようになった笹川さん。



「退職後ではなく早い時期から考えることがポイントでした。現役時代に自分はどうしたいのかを考える機会を持つことが大切だったと思います」と当時を振り返ります。

### 「地域」と「個別」 つながる活動

食事の提供を通し、誰もが集える場である『町民カフェMOCO』。「毎回楽しみに食事に訪れる参加者とのふれあいに、自然と笑顔になりますね」と今もご夫婦でボランティアとして参加しています。

また、幕別町の市民後見人養成研修の受講をきっかけに後見活動にも取り組んでいます。「認知症だった父の権利

### つながりから 得られるもの

学びを通じた仲間とのつながりのほかに、家族の介護に関わる施設や、災害ボランティア活動など、多くの出会いについて笹川さんは、「どのようにつながりの中でも、誰かを支えることで、自分も支えられる」と感じます。誰かの笑顔からは、幸せな気持ちも元氣も、もらえています」とお話ししてくれました。いくつもの出会いが豊かな人生経験となつて、活動の意欲や新たな出会いに結びついている笹川さんの生活。その暮らしぶりに、充実した定年退職後の過ごし方とともに、豊かに歳を重ねていくヒントを見つかることができました。



つながりを諦めない



幕別町緑町で暮らしている服部久子さん(81歳)は、コロナ禍になる前は『かしの会』の仲間たちと一緒に施設を訪問し、ひよっこ踊りを披露したり、地域のボランティア活動など様々な活動や交流を行ってきました。しかし、コロナ禍になってから、活動数の減少や会員の高齢化により、『かしの会』は解散することになった。活発に活動していた頃と比べて自宅にいる時間が増え、「人と話す機会が減るとボケてしまう」と考えるようになったことから、昔一緒に活動していたカラオケ仲間と声をかけて『二十日会』を立ち上げました。その際、宝町にある居酒屋ひこいちのママに、会場として使用させてほしいと相談したところ快く応じてくれたそうです。その時のお話を伺うと、「仲間たちが参加していたカラオケサークルが高齢化やコロナ禍でなくなったことや、少しでもコロナ禍で苦勞しているお店の力になればと思つて、居酒屋とご近所、両方の付き合いがあったひこいちに声をかけたの」と話してくれました。

二十日会の仲間たち



毎月20日の午後1時から二十日会の皆さんが集まり、カラオケやお喋りをしながら楽しく活動しています。二十日会には13名の仲間が参加しており、ほとんどが昔からのカラオケ仲間とのこと。また、全員が心置きなく楽しめるように、敢えて代表者を決めていません。デュエットしたり、お互いに冗談を言い合ったりと皆さんとても仲が良く、素敵な笑顔と笑い声が溢れています。参加者からは、「ここに来ると楽しくて自然に声が出るんだ」「ボケ防止になる」と話してくれました。

服部さんとひこいちのママとは約40年の付き合いがあり、二十日会のお話をした時も、「今度仲間を連れて行くね」「分かったよ、ありがとね」と気心の知れたやりとりがあったそうです。二十日会の運営は、会場や飲食物の準備はママが行い、そのお礼に二十日会の会費を支払うシステムになっています。

コロナ禍の影響により、外に出る機会や人とつながることが減っていた中でも、仲間やお店を気にかけ、新しい集いの場を作ることによって、自分だけではなく、参加者やお店にも活気が出てきました。また、会場をお店にすることで会費を料金として支払うシンプル且つ新しい仕組みは、取りまとめや役職などがないため、今の時代にあつたやり方として今後の集いの場を作る際のヒントになると感じました。

心安らぐ時間  
つながり合う暮らし



札内若草町で暮らしている工藤寿美代さん(84歳)は、地域サロン・体操の仲間たちとの活動や、ご近所さんとの交流を大切にしながら楽しく暮らしています。工藤さんは『若草ふれあいサロン』創設メンバーの一人で、「近所に気軽に呼んでお話しできるような場所があれば」との思いから、2名の友人と一緒に『若草ふれあいサロン』を立ち上げました。「出入り自由で気軽に参加できるし、皆とお喋りできる良い所だよ。ここに参加している方たちの健康作りや安否確認にもなっている」と語ってくれました。

豊かな暮らし方

工藤さんは身体を動かすことが好きで、約30年間『命の貯蓄体操』を続けています。きっかけは、町保健師から体操の案内が届き、「身体の内側から健康を作らないとダメだ」と考え、体操教室に参加したそうです。その3年後には、札幌市へ体操の資格を取りに行くほどに、今でも仲間たちと一緒に若草町近隣センターで実施している体操へ参加し、体操で身体を健康作りをしながら、楽しく交流をしています。

そんな工藤さんですが、2年前に足裏に違和感を覚え、医師と相談し、今年の6月に手術をしました。「足の痛みから遠退いていた活動も少しずつ再開するようになってきた。日々の買い物や活動への参加が難しい時期もあったけど、娘や体操仲間が送迎などサポートしてくれたおかげで元気に過ごすことができたんだ。調子が良い日は、行きは自分の足で行くけど、帰りは自宅まで送ってくれたりして

本当にありがたい」と嬉しそうに語ってくれました。

コロナ禍の影響により、施設が使えない時はどの活動にも参加できませんでしたが、ご近所さんや仲間たちが自宅へ顔を出し、世間話やお茶会をしたり、電話で互いの近況報告や安否確認をしていたそうです。「今はご時世的に食べ物を持って行くのはお互いに気が引けるけど、落ち着いたらまたお裾分けとか持っていて、立ち話や交流をしたいな」と工藤さん。お話からは、仲間たちやご近所さんと過ごす時間が与える影響と、つながりや支え合いを大切にしている想いが暮らしを豊かにすること、それが元気の秘訣になっていることが分かりました。





## 忠類の魅力で つながること



忠類栄町で暮らしている山崎和夫さん(67歳)は、『シーニックカフェちゅうるい』の仲間たちやお客さんと交流しながら、生まれ育った地域で元気に過ごしています。『シーニックカフェちゅうるい』は、6月から10月の期間中一般開放しており、その内7月から9月の3か月間はボランティアスタッフがお茶やお菓子を提供しています。山崎さんは、「自分たちもやってみて楽しくなきたり続かない。ここは月によって見える景色は違うから面白いし、来るお客さんも町内から道外まで色々な所から足を運んでくれる。そこで旅の話聞かせてもらい、次はどの方角に進むのか、旅先の見所やオススメの食事など様々な話をする。この場所を通じて繋がりを持てて嬉しいし、とても楽しいんだ」と笑顔で語ってくれました。

### 力の源・安らぎの場

『シーニックカフェちゅうるい』には、アルプホルンやギターなどの楽器や、十勝管内に関するパンフレットが置いてある。



り、仲間やお客さんと一緒に楽器を演奏したり、遠方からの観光客にはオススメの観光地や食事など、様々な情報を提供しています。山崎さんは、「楽しい思い出を作つてあげるのが私たちの役目。お客さんに、次は友達を連れてまた来るね」と言われるのが一番嬉しい」と話してくれました。仲間やお客さんなど様々な方々が集まり、楽しく交流している『シーニックカフェちゅうるい』は、とても賑やかで笑顔溢れる場になっています。

当時の出来事を思い出しながらお話しする山崎さんはとても楽しそうで、この集いの場を通じて誰かと交流することが大好きな気持ちも伝わってきました。「お客さんの笑顔が私たちの元気」とのこと。

言葉から、この場所が山崎さんにとって元気をもらい励みになる場所であると同時に、安らぎの場にもなっていることが分かりました。

### 楽しい暮らし

山崎さんは、普段からご近所さんや仲間たちとの交流は勿論のこと、カフェを通じて出来た町外の友人と一緒に演奏したり、趣味のカメラで野鳥の撮影など、毎日楽しく過ごしています。また、帰省した方や昔からの友人と会った際は、自宅でプチ同窓会を行って盛り上がりたりすることもあるそうです。

「人が喜んでいたり楽しそうにしている姿を見るとこちらも元気が出るし、次はこんなことをしてみたいと楽しみが出るんだ」と話す山崎さんの暮らしぶりから、誰かと一緒に楽しむことが自身の生きがい・健康作りになっていることや、新しいつながりが更につながりを生むこと、互いに楽しみ思い合う温かな気持ちは人を元気にすることを学ぶことができました。

## つながりの輪と 笑顔広げる毎日



### 包み込んでくれた場所 『赤とんぼの会』

渡辺さんご夫妻(政博さん75歳・あけみさん72歳)は50代になり、夫婦で楽しむ趣味として社交ダンスを始めました。競技会を目指し取り組み中、あけみさんは体調が優れず気分も塞ぎ込むようになり、熱心だったダンスからも離れ、家に籠りがちだったところ、知り合いから誘われ参加したのが『赤とんぼの会』でした。「家から出るきっかけになりました。始めは体調を伺いながらでしたが、回を重ねるうちに楽しくなり元気を取り戻すことができました。私にとって大切な場所です」と当時を振り返ります。



かつては社交ダンスの集まりだった『赤とんぼの会』。今ではダンスやお茶飲み、麻雀などを楽しむ要素に変わり、9人の仲間が気軽に集う場になっています。

### 仲間と楽しみを 分け合う場所

### 『ほほえみサークル』

『赤とんぼの会』で少しずつ元気になったあけみさんは、大好きなダンスへの思いも蘇ってきました。「競技を目指す社交ダンスではなく、自分も周りの人も楽しめるダンスのために、主人と一緒に『ほほえみサークル』を始めました。ダンス仲間との慰問活動では、皆さんの笑顔に、自分も不思議と元気になりましたね」と思いを話してくれました。コロナ禍で活動が制限された時期も、感染対策を万全に渡辺宅に集まり、顔を見せ合う機会を作ってきました。サークル活動で生まれた仲間同士のつながりはコロナ禍でも絶えず深まり、今も毎週金曜日の活動を継続しています。「高齢の仲間のためにも

1曲終わったらしっかり休憩。踊る合間の他愛もない雑談に、声を出して笑います。お互いに楽しみを分け合えて、一人ひとりの日常の元気につながっていると感じます」

### 地域に広がる つながりの場所

### 『サロン活動』

地域の方々が集う『札内西町ふれあいサロン』では、町内会長として東奔西走するご主人を支えながらあけみさんもサポートに加わります。「元気が出せない時でも、誰かが手を差し伸べたり、引っ張って出してくれる場所があることで、誰でも前向きになれるように感じます。自分も誰かのそんな存在として、あたたかい場所づくりに協力できたらいいな、と思っています」と、安心できる場所を持つことで明るい気持ちを取り戻したあけみさん。その経験は地域に広がるつながりの輪となつて、一人ひとりの生活に変化を与え、張り合いや楽しさを生む居場所づくりに活かされています。



## 仲間たちや地域のつながり



幕別町緑町で暮らしている朝川篤子さん(75歳)は、仕事やサークルで出会った仲間たちと交流を深めながら楽しく過ごしています。朝川さんは『ばばパーク』という仕事仲間6名で構成されたグループのメンバーであり、そこで毎週火曜日の午前中にパークゴルフをして交流を深めています。70代の女性の方々が中心ですが、メンバーには男性の参加者も交ざっています。皆さんとても仲が良く、お互いに近況報告やブレイ中茶化したりしながら、分け隔てなく交流しています。パークゴルフができない時期になると、月に2〜3回のペースで、皆で食事をしていくそうです。朝川さんは、「交流の中でこの先の生き方や考え方など様々なことを学ばせてもらっている」と話しており、仲間たちと一



### 地域の支え

朝川さんは、『ばばパーク』以外にも、麻雀サロンや脳トレサークルに参加したり、体調の良い日は朝の散歩などもしたりしています。そこで出会った仲間やご近所さんたちよつとした世間話をするのを楽しみにしています。「私の元気の秘訣は良く遊ぶこと！」と話す朝川さんは、今の暮らしが落ち着いたら、昔やっていたピアノをもう一度やりたいと考えているとのことでした。

ご近所さんとの交流について朝川さんからお話を伺うと、「一緒に暮らしていた母親が認知症になった時に、日中仕事で不在にしていた朝川さんは、ご近所さんに事情を説明し、見守りをしてもらったそうです。「自分たちだけでは限界があったから」今お母さん私の家にいるからねー！」とご近所さんが支えてくれて本当にありがたい気持ちでした」と嬉しそうに語ってくれました。以前に比べると、コロナ禍の影響や引越越し、亡くなつてしまった方もおり、ご近所さんとの関わりは少なくなつてしまいましたが、今でも庭で採れた野菜のお裾分けやちよつとした世間話などの交流をしているそうです。

## 学校と地域が協働するまちを目指して



幕別町忠類栄町にある忠類中学校では、持続可能な社会・地域作りを目指し、総合的な学習の時間の中で地域の課題や魅力について学ぶ取り組みを行っています。白井将之学校長(54歳)は、「まずは子ども達自身が地域に愛着を持つてもらうことが大切だと思う。地域を知り、魅力や課題について自分なり考え、それを地域へ発信・提案して評価していただく。ふるさとの活性化を考える学習を通して、子どもたちが将来的に予測不可能な社会を生きぬいていく力が育まれることを期待している」と語ってくれました。忠類中学校では、3年間の学習を通して、酪農業や林業・行事等、ちゆうるいの基幹産業や地域行事等を体験・調査することで地域の課題や魅力を肌で感じ、それを基に二人一人が地域活性化案を立てる学習を行っています。

### 多世代で地域を考える

幕別町忠類栄町にある忠類中学校では、持続可能な社会・地域作りを目指し、総合的な学習の時間の中で地域の課題や魅力について学ぶ取り組みを行っています。白井将之学校長(54歳)は、「まずは子ども達自身が地域に愛着を持つてもらうことが大切だと思う。地域を知り、魅力や課題について自分なり考え、それを地域へ発信・提案して評価していただく。ふるさとの活性化を考える学習を通して、子どもたちが将来的に予測不可能な社会を生きぬいていく力が育まれることを期待している」と語ってくれました。忠類中学校では、3年間の学習を通して、酪農業や林業・行事等、ちゆうるいの基幹産業や地域行事等を体験・調査することで地域の課題や魅力を肌で感じ、それを基に二人一人が地域活性化案を立てる学習を行っています。

### 教育を核とした地域づくり

白井校長は、「現在抱える地域課題は将来の子どもの課題です。また、現在抱える子どもたちの課題も、将来の地域の課題でもあります。この地区に住む子どもから大人までが、様々な課題を共有し、教育を柱に、豊かに生きていくために協働して、『人づ





「つながり合う暮らし」をテーマにお届けしている「まちびと」は、今回で第5号となりました。ここでは「まちびと」発行のねらいについて、

執筆を担当した2名の職員へのインタビューを通してふりかえります。インタビューは全国各地で地域支援事業を行っている

全国コミュニティライフサポートセンターの橋本泰典さんをお願いしました。

**橋本** まずは加藤さんに聞いてみたいと思います。取材をした感想や何か感じたことはありますか。

**加藤** 私が担当した笹川さんは、前から知っている方でしたが、改めて元気な方だと感じました。回遊魚のように絶え間なく動いている、だからこそ元気なんだと思いました。元気で動いていることで、気持ち明るくなっているということがお話しを聞いていて伝わってきました。

**橋本** マグロの笹川みたいな（笑）。本人も自覚があるんですかね。

**加藤** そうですね。一日、体も頭も動かすので、それでハツラツとしているなというのをすごく感じました。

**橋本** こういう暮らし方を

元気なときからしておくことが、実は最後の豊かさに繋がるんじゃないかと思いません。そして、その暮らしぶりをご本人さん達にも自覚をしてもらって、こういう暮らしこそが大切なんだと思ってもらえるといいですよ。さらに言うと周りの人達や福祉の専門職にもそういう暮らしが大切だと理解してもらって、少しでもこうした暮らしが長く続くようにサポートしてほしいですね。

**橋本** 倉重さんが感じたこととで印象的なことはありましたか。

**倉重** そうですね。話を聞くときに皆さん、楽しそうとか嬉しそうにすごくいい表情でお話ししてくださるんですよ。なので自分も温かい気持ちというかい



橋本 泰典氏

い気持ちになりますね。とてもうれしく思いました。

**橋本** 取材を通して、取材する側が元気をもらえるよくな、そういう感じを受けたんですね。あと倉重さんが取材してくれた中で服部さんのお話しがあったと思いますが、お昼に居酒屋に集まるというのがすごいなと感じました。サロンとか、集まりの場を集会所だけじゃなくて、こうやって近所にある居酒屋の昼間時間に目をつけて開催するというのはいですね。そしてちゃんと

店にお金が落ちる仕組みもある。地域の居場所もできる、地域のお店も潤う、両者が得をする上手い仕組みだと思います。これはやっぱり暮らしの中の知恵で、人も「お宝」ですけど、この知恵も大切な「お宝」なんだと思います。また「代表を決めていない」と文中にありましたが、服部さんの役割って何かあるんですか？

**倉重** 日程の調整とか、当日来られなかった人に連絡をしたりしています。

**橋本** 記事にもありましたが、いわゆる会計さんがいない集まりのあり方って新しい形ですよ。次の世代の集まりのあり方の参考になるかもしれない。代表者も決めなくてやれるのは、会計をそうやってシンプルにしているからでしょうね。20日にただ集まればいいのか誰かに負担をかけずに気楽に集まれる。でも、その日來なかつたメンバーのことを気にかけて電話したり、様子を見たりしたりしているところが素敵ですよ。



左から加藤、倉重

**橋本** このコロナ禍の中で盛んにフレイル予防って言われるようになりました。フレイル予防の一番最初は社会とのつながりとも言われていて、二人一人の健康を守ることがとても大切だけど、一人一人と仲間や地域社会のバラスを上手にとっていくことが、実はフレイル予防につながっていくのだと思います。今回の「まちびと」を読んで、社会とのつながり方について、地域の人たちは、今までやり方にこだわらず、新しい地域とのつながり方とか集団の運営方法とかを自然と生み出しはじめているように感じました。そして「まちびと」にあるような、集りの場に隠れている大切な意味とか視点が読む人に伝わればいいなと思います。